

## 〔「涼を呼ぶ美術」展によせて〕

## 至高の龍王 — 「善女龍王像」 (金剛峯寺蔵) をめぐって—

雨が降ることを祈って行われる「請雨経法」は、密教修法の中でもとりわけ重要なものとして、数多く行われました。日照りによる農作物への影響は、飢饉や疫病を引き起こすため、効果的な修法を行う僧侶は天皇や貴族の信頼が篤く、各宗派は競って効力に磨きをかけました。山城小野に曼荼羅寺(現在の随心院)を開いた仁海(951~1046)は、「雨僧正」と称えられる法力の持ち主でした。修法では、大壇を築いて仏舎利と経典を置き、空海の御影とともに二種の曼荼羅を用いました。二種とは、懸けて用いる仏像を描いた「懸曼荼羅」と、敷いて用いる五龍を描いた「敷曼荼羅」です(『厚造紙』)。展覧会に特別出陳される「図像抄」(大阪市立美術館蔵)には二つの図像が掲載され、その具体的な図像を知ることが出来ます。懸曼荼羅は、中尊が海中より湧出した蓮華座に座る釈迦像で、楼閣で説法をする姿です。脇侍には金剛手菩薩と観音菩薩がおり、波間から釈迦を拜む三龍王が姿を見せています(図1)。一方、敷曼荼羅には中央と四方に五龍王が描かれ、四隅にもそれぞれ龍が表されます(図2)。『図像抄』の他、『別尊雑記』や『覚禪抄』といった図像集にも掲載されています。

請雨経法の始まりは、天長元年

(824)に空海が神泉苑で執り行った修法とされます。史実とは異なるようですが、平安時代後期以降広く流布し、説話や社寺縁起にも見られます。ただ、空海の修法で注目されるのは曼荼羅ではなく、修法の際に愛宕山に現れたとされる善女龍王です。金剛峯寺には、久安元年(1145)に権律師琳賢(1074~1150)が開眼供養し、絵師定智によって描かれた作例が現存します(図3以下、定智本と略称)。また、定智本を写し取った白描図像が醍醐寺に所蔵されています(図4)。図中に書き込まれた色註や大きさから、紙形としての役割を担うために筆写されたものと思われる。画面上端には旧裏書が添付され、建仁元年(1201)、深賢が「醍醐寺北房」において写し取ったことが分かります。善女龍王は、左手に華盤に盛った如意宝珠を持ち、右手は人差し指と中指を曲げて親指に重ねる印を結び、唐装の男神像として湧き上がる雲に立つ姿です。わずかに画面右下に描かれた尾よつのみ、龍王であることが窺えます。図中の色註から、本来は色彩豊かな画像であったことが窺え、醍醐寺・大通寺には模本が現存します。しかし、善女龍王は正規の経典や儀軌には説かれず、図像典拠は明らかにさ

れていません。院政期、鳥羽の勝光明院宝蔵に空海筆とされる善女龍王像があったことが記録から窺えるのみです。その姿は宋の図像から着想を得たことが推測できますが、図像典拠を探る手がかりとなる作例が遺されています。

東京藝術大学に所蔵される「北斗曼荼羅図」(図5)は、図像家・玄証(1146~1222)が蒐集した白描図像で、紙背文書の年号から、久安四年(1149)に転写されたことが分かります。画面中央、向かって左手へと進む熾盛光仏を中心に、五曜、二天、羅睺星、計都星、文官風の二十八宿と十二宮、円相内に日月神、北斗七星などの星座が描き込まれます。この文官風の尊像の中に類似する図像を見出すことが出来ます(図6)。左右の違いはあるものの、左手に盤を持ち、右手は中指と薬指を曲げる印相、鼻の下と顎に鬚を蓄えた顔貌、足下の沓や雲に乗る姿は定智本を想起させます。宝冠の細部装飾や、肩に見られる飾り、鱗袖の有無などの違いはありますが、両者には類似する図像的特徴が認められるのです。さらに、腹部の衣に記された色註には「白」「タン」とあり、深賢による善女龍王図像の同一箇所にも「丹」と記されることから、彩色も類似する可能性が高いと思われます。

「北斗曼荼羅図」には「唐本」と註記がなされ、宋代の星宿図像を転写したものと考えられますが、定智本と同時期に転写された白描図像に、

類似する図像が見出せる点は注目されます。また、定智本は琳賢によって発願されましたが(『又続宝簡集』)、彼は高野山検校をつとめ、当時、大伝法院を建立し真言の復興活動を行い、山内に影響力を広げつつあった覚鑿(1095~1144)に対抗する人物でした(白井優子「院政期における高野山第十九世検校琳賢の活動」『史潮』45、1999年)。覚鑿の大伝法院には、壁面や柱絵が描かれていたが、東西後壁の絵を描いたのは定智です(『大伝法院本願聖人御伝』)。高野山内での主導権をめぐって対立する関係にあった琳賢と覚鑿ですが、それぞれが発願した作画活動に携わったのは、巧みな画技が高く評価されていた定智でした。発願者である僧侶が属する流派や思想とは一線を画しつつも、求められた絵画制作に従事する絵師の気概が感じられます。

定智本は画面の損傷は惜しまれますが、均質でありながらも力強く引かれた墨線に、彼の高い画技が窺えます。さらに、龍王像の中でも気品ある堂々たる姿が見事な平安仏画の基準作であり、まさに至高の龍王像といえるでしょう。

(古川攝一)

※図3・5・6は特別展『清雅なる仏画—白描図像が生み出す美の世界—』図録、大和文華館、2012年、図4は特別展『美麗—院政期の絵画—』図録、奈良国立博物館、2007年より複写致しました。

図1



図2



図3



図4



図5



図6

